ウェブページ用

平成２８年度　第２回富士市総合教育会議　　会　議　録

開催日 平成２８年１２月２１日　水曜日 開　会　　１５時００分 閉　会　　１６時４５分	会議場 市庁舎９階　第二委員会室
出席者の氏名 市　　長　　小長井　義　正 教　育　長　　山　田　幸　男 教育長職務代理者　　加　藤　馨　一	教育委員　　吉　川　智　子 教育委員　　毛　涯　　晋 教育委員　　和久田　惠　子
出席職員等の氏名 教育次長　　畔　柳　昭　宏 教育総務課長　　高　柳　浩　正 学校教育課長　　望　月　光　明 学務課長　　尾　澤　　聡 社会教育課長　　有　川　一　博 中央図書館長　　渡　辺　長　夫 教育研修・特別支援教育センター所長　市　川　清　美	富士市立高校事務長　秋　山　道　博 青少年相談センター所長　丸　山　和　彦 教育総務課調整主幹　押　見　賢　二 教育総務課主幹　　小長谷　　聡 教育総務課指導主事　富士本　享　之 教育総務課指導主事　五十嵐　崇　人 傍聴人２名

議題（動議）及び議事の大要

（議　案）

議第２号　義務教育の接続の在り方の方向性について

ウェブページ用

「議第２号　義務教育の接続の在り方について」

教育次長
　これより、第２回総合教育会議を開催する。
　開会にあたり、小長井市長からご挨拶をいただく。

市長
　本日は、本年度の教育行政の重点課題の一つである「義務教育の接続の在り方の方向性」について再度意見交換したいと考えている。
　７月の第１回総合教育会議では、静岡大学の武井教授をお招きし、「小中一貫教育の現状と課題」と題して講演いただき、意見交換させていただいた。
　義務教育の接続の在り方の方向性については、本市も教育委員会事務局において検討会議を何度も行い、検討を重ねていただいたので、検討状況を事務局から報告していただきたいと考えている。
　そのうえで、教育委員会の皆様と活発な意見交換をしていきたいと考えているのでよろしくお願いしたい。

教育次長
　本日のテーマは、「義務教育の接続の在り方の方向性について」である。
　これより、議事の進行は、本会の主宰者である小長井市長にお願いしたい。

市長
　本日は、議第２号「義務教育の接続の在り方の方向性について」意見交換を実施する。その前に、教育委員会事務局から、検討を重ねていただいている状況の報告をお願いしたい。

事務局
　「義務教育の接続の在り方に係る検討結果」について説明

市長
　それでは義務教育の接続の在り方の方向性について、事務局へのご質問や皆様のご意見を伺いたい。

教育委員
　９年間を一括りで連携していくことには大きな意味があると感じた。先日、京都を視察させていただき、小中一貫校を見させていただいいた。先程の報告にあったように、発達段階の過程を眺めながら９年間を見ていけること、学習の内容をきめ細やかに１年生の時から９年生、いわゆる中学３年生までを見ていくことができる連携は、

ウェブページ用

今後の教育にとっては非常に必要なことということを強く感じた。報告書の６ページあたりに出ている成果についてであるが、当然のことながら、中１ギャップに関しては、非常に大きな成果が出てくるとは思うが、自己肯定感の向上とか、思いやりや助け合いの気持ちの高まりというのは、９年間に一貫したからといって、成果として出てくるということではないと思う。その中で、どのような指導方法で教育を行うかということが非常に大事なことではないだろうか。９年間を接続すればすべての課題を解消できるわけではないので、指導方法や運用方法というところに非常に大きな課題が山積していると思う。今話したように、中高の接続もある。中高の接続を見てみると、完全に受験体制で連携を取っている形が目立っている。しかし、小中の場合には、子どもの心の成長とか生徒指導面で非常に成果が上がってくるのではないかということを感じている。

市長
　９年間を継続すればいいということではなく、まさに指導方法や教育の質というところであろうか。全国的な取組について話があったが、事務局はその意見についてどう感じているか。

事務局
　成果に結び付けていくためには、どこを目指して指導をしていくかが重要であると感じている。教育委員会として、どこを目指していくのかをはっきりとさせておく必要がある。今後、検討委員と論点を整理しながら共通理解を図っていきたい。

市長
　成果がいろいろと挙がっているが、富士市としてはどこに重点をおいていくことになるか。

事務局
　２点あり、教育活動のさらなる充実、児童生徒の発達段階に応じたきめ細やかな指導体制の確立を目指していきたいと考えている。

教育長
　昭和50年代だっただろうか。学校が非常に荒れて、対教師暴力や生徒の非行が本市においても多発していた時期があった。私の記憶が正しければ、その解決策として小中一貫教育を行ったらいいのではないかといった声は、あまり出なかったように思う。その当時、どこに目が向いていたかというと、いわゆる詰め込み教育とか落ちこぼれといったことが非行につながっていたと認識している。小中で連携して取り組めばいいという声はあったかもしれないが、これまでの教育の反省というか、私が記憶しているところでは、文科省もそちらに目が向いていたように思う。そのようなことが思い起こされる。今それから何十年も経ち、小中一貫教育の必要性が改めてクローズアップされてきているわけである。やはり、自己肯定感が小中一貫教育を導入したから

成果に結びつくとは限らないという話があったが、本質を見極めながら、小中連携・一貫教育の在り方を研究していく必要があるのではないか。私は教育長として、富士市の教育を預かっている身として、やはり、自分たちの目で確かめつつ、富士市なりの小中連携・一貫教育を実施していきたい。決して失敗は許されないから、制度だけを性急に導入しても、他所の自治体がおかれている状況と違うため、その点をしっかりと見極めつつ、より効果的な富士市らしい富士市モデルの小中連携・一貫の在り方を、せっかく１年目でこれだけできたので、２年目は、外部の方にも検討していただいて研究を進めていきたい。ただ言えることは、小中学校が連携を進めてくると、小中学校がお互いに９か年を見据えた教育をしていくようになることは、当然のことである。

市長
　当然それぞれの自治体において事情が違っているであろうし、富士市においても、地域によって物理的な部分で小中が非常に近くにあるとか、どちらかが老朽化し、どちらかが新しくなっているといった条件もある。モデルというか、こういうところを目指していくという点では、基本的なところがあって、すべての小中学校に同じようなことが提供されなければならない。その点はどう考えているか。

教育長
　ベースがあって、例えば16中学校区あるわけだから、その置かれている特性を活かしつつ校舎が離れているところもあるし、何が連携できるのかそのような研究をしていきたい。司会が変わってしまって申し訳ないが、市長は、昨日小学校と中学校を見に行っていただいたが、率直な感想をお聞きしたい。

市長
　昨日の午前中に、小学校と中学校を学校訪問させていただいた。基本的には、すべての小中学校を見させていただきたいと思っており、精力的に回っているところである。昨日訪問した小中学校は、ご存知の通り、一つの小学校と中学校が道路を挟んであり、三叉路になっているところに歩道橋で学校間がつながっており、物理的に非常に好条件にある。実際は、連携という言い方になろうかと思うが、大変進んでいる印象を受けた。教師がそれぞれ行き来をしながら、授業を担当している。子どもたちも行き来をしながら交流をかなり行っている。それによって確実にいい成果が出てきている。一つの科目で言ってよいか分からないが、小学校の児童が、中学校の教師の専門的な指導を受けて成績がぐんぐんと良くなっている。それが目に見えて成果として表れている。いろいろと取り組んでいると、プラスのことが出てきている。短い時間ではあったが、そこに携わっている先生方から話を伺って実感した。もちろん、道路一本離れているだけでも大変なところがある。行き来をするにしても時間割が違うとか、休み時間に小学校は業間の２０分休みを入れたいとかといったことが実際にある。ただ、そういったところは運用の面で解消していただけないかという思いがある。それからもっと大事なことは、地域の皆さんの力、関わり方が外せないと思った。とく

に、小中一貫教育をしていくにあたり、地域の皆さんにも一緒に関わっていただきながら、地域の子どもは地域で育てていくという機運があった中で、小中一貫教育を実施していくと相乗効果で成果が現れてくるのではないかということも実感した。今の部分だけでも、十分成果として得られているのではないかと思っている。さらにまた工夫をして、いいものを創り上げていくことができるのではないかと思った。さらに進めていくにあたり、どの方向へもっていくかというところが重要であると感じた。

教育長

もう一つ言わせていただくと、地域と一緒にやっている。逆に地域から押されているというところが、この地区のすばらしいところであることから、コミュニティ・スクールを指定させていただいており、我田引水で申し訳ないが、そうした後押し、一体となってやっているところが他のところでは見られないいいところだと、もちろん、課題も細かいところは多くあるが、そのような印象をもっている。

市長

非常に近いところに小中学校があり、物理的にもつながっているということなので、もちろん小中学校が離れているとか、中学校１校に対して小学校が２校というところもある。今後どういった形で進めていくことができるか、いろいろなところを今後考えていかなくてはならない。しかし今言った「富士モデル」はこうだということは、どこの地域、小中学校においても同じ理念でなければならないと思っている。

教育委員

小中一貫教育のよさというのは、先程教育長が言われたように、地域の子どもは地域で育てるというところが一番大切なところだと思う。このことは、やはり地域の人たちをもう一度学校に目を向けさせるきっかけにもなると思う。先程の話にあった地域は、そういう形がかなり前からあって学校に協力しているため、成果が現れていると思う。富士市にある16中学校区のいずれも、地域の子どもは地域で育てるという、自分たちの子ども、自分たちの学校と思えるような環境づくりが大切だと思う。別に新しい建物を造るのではなく、条件が整ったところから新しい施設を造って小中一体化、施設の一体化で伸ばしていくことが一つのきっかけになり、他所の地域もそういった環境にあれば、そういう形にしていく。そうすれば、新しい建物を個々に建てるよりも非常に合理的であるし、教育の成果も上がってくると思う。京都へ視察に行き、小中一貫校を見てきたが、京都市は明治２年から町衆が番組小学校をあちらこちらに設立し、教育をしていたと聞いた。70の中学校区で進めているらしいが、平成23年度には、京都市全部の小中学校が小中一貫教育を始め、コミュニティ・スクールも指定している。施設の一体化は４校で、後は施設を併用している。私たちは、施設一体型と分離型の一貫校を見てきた。地域の独自性を活かすために、６－３制を４－３－２で行うところもあるし、５－４で行うところもある。小学校６年生から中学へ行ってしまうと、中１ギャップを感じて、中学へ行った途端にいじめや暴力、不登校が全国的に急増している。そういう現象の原因は何かというところを解決するために小中連

携や一貫教育が国でも叫ばれ、着手しているわけである。多くのところを見てみると、成果のほうが極端に上がっている。いじめや暴力、不登校や怠学といったものも大きく減っている。他の児童生徒の学力についても、小中一貫教育の導入によって文科省の調査では成果が出ているわけであるから、心の問題というものはもっと欠落しているわけであるから、６－３制の教育制度の見直しなり、あるいは運営方法を見直すということは、教育行政としても着手していかなければならない問題である。早め早めに対処していかないとまずい気がする。是非、条件が整っているところについては、早く施設の一体化を打ち出して、お金はかかるかも分からないが、長い期間で見れば、かなり費用削減につながっていくような思いがある。これまで、６－３制でやってきたわけだが、私たちの時代には日本の国内で通用する教育をしてくれば十分だったわけだが、これからは、日本の国内で通用する教育をすればよいというわけではないから、そのために、こういった小中連携や小中一貫教育が様々なところで叫ばれ、手を付けているのではないか。また、ゆとり教育が叫ばれ、皆喜んで一旦は受験戦争から開放されたけれども、学力が極端に落ちてしまい、心の面も問題が出てきてしまった。そういった反省から、今は小中一貫教育の必要性が叫ばれているような思いがある。国の指定を受けて取り組んでいるところは、実績として数字で小中一貫教育のメリットが出ているわけであるから、富士市としても遅れないように先んじて手を付けていく必要がある。市全体ではいろいろと取り組んでいると思うし、校長会でも話をしていると思う。したがって、もう一歩進んだことを対外的にＰＲというか打ち出していく必要がある。

市長

中１ギャップという話もあって、そこを何とか解消するためにということだが、昨日行った小中学校は、どちらかというと、そのまま中学校へ進学するようなものである。もともと中学校の先生を知っていることもあってか、他校と比較しても不登校などが非常に少ない。問題行動もほとんどないと聞いた。教育長に聞きたいが、中１ギャップというのは、違う環境に置かれたことによるものと報告にあるが、１小１中の場合より、２小１中とか、小中が離れている場合の方が発生しやすいのか。また、そういったデータはあるか。

教育長

基本的には、昨日参観していただいた学校も含めて小さい学校、いわゆる１小１中の場合は、同じ環境で進学していくので、問題行動等も比較的少ないのではないか。ただ、今申し上げたように、小さな学校でそうだからといって２つ３つの小学校から中学校へ来ると、人間関係の新たな摩擦が起きてしまう傾向にある。また、これは、小さい学校も同じことであるが、指導方法の違いとか、部活動が急に入ってくるといった要素も加わってくるので、いわゆる不登校とか、いじめとか問題行動が起きるケースは、いろいろなところから一つの中学校へ来るケースの方が多い。

教育委員

複数の小学校から中学校に来る場合には、やはり生徒にとっては、中１の時にギャップが生じる。不安であったり、自己表出ができなかったり、能力を発揮できなかったりして、お互いにけん制し合うようになる。他の者をいじめるとか、学校へ行くことが嫌になるといった問題につながる。京都のある分離型の一貫校は中学校１校と小学校２校にそれぞれ校長がいて、２つの小学校から進学することになっているが、６年生は中学校の学舎で学んでいる。したがって、小学校から中学校へいった時の驚きや変なプレッシャーをなくなっているようにさせている。

市長
小学校の段階で、小学生同士の交流をさせているということになるのか。

教育委員
本市でもそれは行っている。２つの小学校から１つの中学校へ進学する場合には、事前に小学校同士が中学校を中心にして交流をもったり連携したりすることは、いろいろなところで行われている。

市長
どの程度の交流をしているのか。

教育委員
行事とか様々な場面で一緒に交流している。

教育長
視察に行った学校は、同和地区を抱える特別な事情がある中学校区が小中一貫校となり、かつては荒れていて、とても大変な問題を抱えていたと聞いた。

教育委員
小中一貫校になることに対して、保護者や地域の人は皆大賛成だと聞いた。ただ、本市の場合には、将来の人口を見据えて学校の面積を縮減、減築していかなくてはならない。京都の場合で優れていたことは、複合施設になっていて、一体化が進んでいることである。高齢者介護施設や商業施設、コンビニエンスストアーも入っていて、保育所も併設されていた。そこに学校があることである。学校施設が冷暖房完備だった。吸収合併された小学校はどうするかというと、使えるだけ地域の人に開放し、今後は隣接している学校の敷地にある古い校舎は運動場、水泳場、子どもの遊びの施設にする予定だと伺った。

教育委員
違う視点で、恐らく今お考えで進めておられると思うが、絶対避けては通れない学校施設の老朽化と子どもの数の減少がある。この報告の文面から見ていると、当然施設の３割位が必要ではなくなることは、間違いのない現実の姿である。そこを無視し

て小中一貫を進めてもよいものなのか。理想としてはお金のことだから無視してもよいと思うが、そういった問題が対象となる学校区というのは、先に読めるわけである。そこに対して、将来先のことまでというのは確かに難しいかも分からないが、どういった連携や一貫教育をしていき、例えば、本当に単独の小学校で維持ができなくなった場合はどうするのかといったシミュレーションを考えながら、連携や一貫教育といったものを考えていかなくてはならない。これはどんなに努力しても、学校施設の老朽化と子どもの人口といったものはある程度予想は出ているものであるから、そこを無視した形はできないのではないか。その前にどうするのかということを議論し、そして、今こそ、先程皆さんがおっしゃった、地域の方々の協力がないと、やはりそう簡単に学校をどうこうということはできにくいと思うので、そういうことを踏まえて議論をしていくことがよいと思う。これは多少先の話であるが、そこを当然避けては通れない問題だと思う。

市長
　もちろん、教育的な観点から小中一貫教育についての議論が基本であるし、必要なことでもある。そうは言っても現実的な問題があるわけで、それをどうするのかといった中で考えていかなくてはならない。地域によっては人口減、または、子供の数が非常に少なくなっていくところもある一方、増えているところもある中で、モデル地区としてできるところは進めていこうというような考えかと思う。決してこのことは後退するとか、地域にとってマイナスに捉えるということではなく、プラスになるということで、地域も一緒になって応援するという捉え方で小中一貫教育を進めていかなくてはならないと思う。その中でモデル校、モデル地区というものを何箇所かつくっていくということが大切である。

教育委員
　おっしゃるとおりだと思う。

教育長
　当然、今からそういう角度でシミュレーションを考えておくことは、大事だと思っている。両方の面から一致して、こうしましょうという形が一番だと思っているので、教育委員会の施設担当は、公にはできないがいくつか設計を描いており、私もいくつか腹案をもっている。先程教育委員がおっしゃった意見は大事な観点だと思っている。

市長
　今回、この内部資料の中にも老朽化が進む学校施設についての記述があり、これは学校施設のみならず、すべての公共施設、または、土木インフラを含め、老朽化していくことに対する対応は、富士市のみならず、どこの自治体においても迫られている。こういった観点はこれとして、基本的な部分は教育的な観点を念頭においた上で、子どもたちにとっての富士市の教育の在り方について、しっかりと議論をしていただいた中で、現実は現実として捉えていき、いい形でモデル的に進めていくということで

はないかと思う。

教育長
　予算の関係があり、来年度のことは確約できないが、小中一貫教育に関する研究の指定を明確にし、公表して、富士市内の全小中学校に周知をして進めていきたいと考えている。教育委員から先程、よいことなのだからと言われたように、一歩進めたい。ただ、予算を付けていただかないと進まないことであるので、検討をお願いしたい。

市長
　確実に進めていかなくてはならないテーマであると認識している。

教育委員
　いろいろな視察をさせていただき、市内の小中学校の取組も見させていただき、子どもたちを取り巻く周りの環境がどんどんと変わっていくことが可能な制度であると心から思った。何とかしようとみんなで思いながら、ＰＴＡであり地域であり、周りのみんなが見てくれるような制度になっていくのかなと。それがただ、やはり先程教育長がおっしゃったように、地域に差がたくさんあり、今連携が行われているが、その連携にも差がある。一貫教育という長い目で見ていく中では、たくさんよいところが出てきているので、本当に子どもたちにとってよりよい制度になってくれることを期待している。

市長
　地域が非常に鍵を握ってくると思う。コミュニティ・スクールというのは今後どうなってくるのか。

教育長
　これは、予算の計上が可能であればこれまで以上の指定を考えている。

市長
　ここだと思う。コミュニティ・スクールを広げていくことが小中一貫教育につながっていくことになるという気がする。

教育長
　１年間時間を取ったのは、決して停滞ではなく、次へのステップのための時間であったので、これだけの成果が広がってきているから、来年度は複数以上広げていきたいと考えている。

市長
　コミュニティ・スクールの指定は、それほどの予算にはならないのではないか。

ウェブページ用

教育長
　そう言っていただけるとありがたい。

教育委員
　連携は各校で進めていて、一貫教育も連携教育の一つである。コミュニティ・スクールの指定は、それほどの予算にはならないのであれば、学校運営協議会の設置を複数とは言わず、やはり、できるところから打ち出していってほしい。地域の子どもは地域で育てるとなれば、指名されたことで喜んで参加すると思う。したがって、できる限り地域の人たちに学校へ目を向けてもらう政策を行政として早く打ち出していくことが得策だと思う。建物は後になっても構わない。ただ考え方だけを打ち出していくということ、それが、地域の人たちの目を学校にもう一度向けていただくことにつながる。京都の場合は、平成23年度に全小中学校で小中一貫教育の実施、コミュニティ・スクールの指定を打ち出している。それから施設一体をできる限り建設していこうという案をもっている。その打ち出していくということそのものが教育の成果ではなかろうか。そうであるなら、富士市民の多くが、そういった市の行政の考え方に賛同すると思う。京都の例を見ると、そんなことはできないという人はほとんどおらず、地域からそういうことを進めてくれということが出ていると聞いた。富士市にも地域に一体感があるところがたくさんあるので、そういう人たちの目を起こして学校に向けさせることが重要ではないだろうか。自分たちのまちづくりというのは、やはり、地域の子どもたちの教育であること、子どもは財産であるということを行政として打ち出すチャンスではないだろうか。私はそう思うので、是非ＰＲをやっていただけたらありがたいと思う。

市長
　今の時点で、表現上は「義務教育の接続の在り方に係る検討」というように止まっているが、富士市としてこれから小中一貫教育を進めていくということを明確に打ち出せるかどうかというところかと思う。

教育委員
　私は是非そうすべきだと思う。逆にあまり遠慮をする必要はない。どんどん進めていってよい、施設は後回しでもよいと思う。

市長
　でもおそらく学校施設のことも将来的には考えていかなくてはならないわけだから、早い段階で地域の皆さんと、先ずはコミュニティ・スクールかも分からないが、小中一貫教育の話をしていきながら、将来のハード整備を一緒になって進めていくことが大切ではないか。

教育委員
　大切なことだと思う。教育ほど大切なものはないし、教育に対しては反対する人は、

少ないと思う。教育というのは、みんなが参加できるものでもある。今がチャンスだと思っている。

市長
　私も皆さんとは同じ思いである。このように、議論を重ねていけばいく程、必要性というのを強く感じてきている。そういうことを打ち出していけば、当然地域によって差が出てくることは予想している。少しずつ同じような形で、同じような思いになっていくように進めるためにも、打ち出していくことが必要かと思う。

教育委員
　小中一貫教育を打ち出す方法は、丁寧にしていかなければならない。２学期制に切り替えるときも保護者からたくさんの質問が出た。それが何故よいのかということを、保護者みんなが理解しないといけない。進め方の早いところと遅いところがあれば、遅いところの保護者はどうしてくれるのかと必ず出てくるので、そういったところを丁寧に説明していく必要があるのではないだろうか。新しいことをするのであれば、そこの土台作りをしっかりとやっていかないと、逆に要らぬところで反発を受ける可能性もあり、その点に留意すべきである。

市長
　実際に具体的な部分で考えていけば、すぐ動き出せるようなところもあれば、なかなか時間がかかりそうだというところもあるので、そういった計画をなかなか立てられないような状況もあるだろうから、そういった配慮は必要になってくると思う。後は、我々のこういった議論を、どのようにしたら保護者の皆さんや地域の代表の皆さんを巻き込んでいくことができるかについて、すべての小中学校で進めていくという方向を出す前の段階で、必要になってくると考えている。

教育長
　もう一つは、小中一貫教育を実際に進めていくのは教職員であるので、そうした角度から見ていく必要があり、もちろん、慎重にしたいと思っている。教職員の小中一貫教育への合意形成を図りながら進めていく必要があると思っている。

市長
　実際に戸惑いもあるだろうし、当然、両方の免許を有する方がどんどん増えてくればよいが、そうはいかない場合もあるだろうし、逆に負担がさらに増えてしまってもいけない。コンセンサスを得るためのいろいろな取組をしていかなくてはならないと思っている。

教育長
　しかし、すぐにでもできることは、当然ある。

ウェブページ用

教育委員
　コミュニティ・スクールの指定は足がかりとなりそうだ。

教育長
　コミュニティ・スクールも、本当に現在の設置校ががんばっていい成果を挙げてくださっている。設置する場合は、一人ＣＳディレクターを雇用しないと、学校が大変になってしまうので、予算に計上していただいて、来年は何校になるか分からないが、それは若干のお金を伴うので、制度面を大事にしておかないと学校は機能しなくなるため、そこだけは大事にしておきたいと思う。

市長
　時間的にそろそろではないかと思う。他によろしいか。一通り教育委員の皆さんからご意見をいただいて、すぐに進めなくてはならない部分や将来的な部分など、いろいろなことが少しずつ示されたのではないか。非常に意義のある総合教育会議を開催することができたのではないかと思っている。来年度の予算編成について示唆をいただいたと受け止めさせていただき、この場は閉めさせていただきたいと思う。

教育次長
　皆さん長時間にわたり活発なご議論いただいたことに感謝申し上げる。
　以上をもって第２回目の総合教育会議を終了する（御礼）。　　「閉会」